



牢屋の窄殉教記念聖堂

ゴルゴダの丘をイメージさせる土地からは海、その向こうに集落が見える。(上)
島のお土産にと販売されていたのは、信徒さん手作りのストーンアート。(下)

教する人はほとんどおらず、四十三名の方が犠牲になりました。
殉教者の名前は一人ずつ碑に刻まれている。「ジュリアナとし 四才」「パウロ 力松 三才」など、子どもも多く見受けられ、中には両親が先に亡くなったのだろうか、「姓名不詳の幼児」と刻まれた碑もある。「マリアたき 十才」「これからバライゾに行くから父さんも母さんもさようなら」と刻まれた碑には、胸が締め付けられた。
自身もカトリック信徒だという川口さんはこう言う。「もし今、私が拷問を受けたら耐えかねて、すぐに逃げ出してしまおうでしょう。彼らはなぜ信仰を貫くことができたのか、とよく聞かれますが、それは永遠の命を得たからではないかと思います。今この時を我慢すれば、天国で神様と一緒に暮らすことができます。それを夢見るほどに、彼らの生活は貧しく、苦しかったのだらうと思います。久賀島の信徒さんたちにとってこの場所は、先祖たちが苦しい中で信仰を守ってきた場所であり、一番の心のよりどころ、原点なのです」。

牢屋の窄殉教記念聖堂では毎年秋に島内外から多くの信徒が集まり、殉教祭が行われるという。聖堂のそばに植えられた小さな花が、この場所が大切に守られていることを教えてくれた。

一 八六八年、久賀島では島内の信徒たちが捕らえられ、残酷な責め苦を受けた。その場所に牢屋の窄殉教記念聖堂がある。二百名の信徒たちは八カ月もの間、十二畳ほどの牢に押し込められた。横になることも許されず、排泄さえもその場で行わなければならず、冬には目の前の冷たい海にさらされた。敷地内の高台には「監視所跡」の碑が見える。
川口さんはこう話す。「のちに『五島崩れ』と呼ばれる五島のキリシタン弾圧はここから始まりました。実は彼らが閉じ込められた牢屋は最初、ここから三百メートルほど離れた場所がありました。それをわざわざこの場所に移したのです。それは、この対岸に仏教徒の集落があるからでした。役人たちは拷問しながら『信仰をやめれば、向こう側の人間になつて普通の生活が送れる』と言って、棄教を迫りました。しかし、ここでは棄

それでも
彼らは
信仰を貫いた。

久賀島 世界遺産の島 HAKA ISLAND

「信仰之碑」の前には殉教者の名前が刻まれた石碑。1人ひとりの名に、1つひとつの人生があったことを思い知らされる。



敷地内の花壇に咲く花。信徒さんたちによって手入れされていた。

「五島市ふるさとガイドの会」会長の川口進さん。歴史だけでなく、風土や植物についても詳しく、豊富な知識で島を案内してくれる。